

おじいちゃんへ

ラジオネーム…きみこ

おじいちゃん、おじいちゃんの五十回忌がコロナの影響で規模を小さくして営まれると、母から連絡がきました。

昔、親戚の誰かが、五十回忌は生きているうちに数えるほどしか参列できない貴重な法要で、赤いろうそくでお参りする、お祭りでもあるんだよと教えてくれました。

確かに、ご先祖様が亡くなって、五十回忌の法要を営む身内が生きているということは、それぞれが半世紀生き抜いたという証であり、懐かしさと、感謝の気持ちと、身内が顔をそろえることで生まれる温かい気持ちに包まれた、お祭りみただいなあと思っています。

私が小さい頃の一番印象的な出来事は、実はおじいちゃんのお葬式なんですよ。

父が運転する小さな車に1時間ほど揺られ、車1台通るのがやっとの細い坂道を上った先にある白い壁の大きなお寺。

昔の事なので、お堂が少し薄暗く、参列された皆さんの頭が影になってずらりと並んでいるのを覚えています。

祭壇にあるおじいちゃんの遺影は髪の毛がなく、やせけて、薄暗いお堂の中で少し怖い顔に見えました。

訳あって、おじいちゃんは長兄のおじさんの家で、おばあちゃんは末娘である私の母の家で、それぞれ暮らしていたので、実際に触れあった記憶はないのですが、五十年経って、おじいちゃんがいたから、私もいる、ということをごんわりと感じています。おじいちゃん、ありがとうございます。

五十回忌は、随分前からなんとなく楽しみにしていたのですが、コロナでみんなに会えないのが本当に残念です。それとも、おじいちゃんが生きているうちに会えなかった孫が参列したいと思う方が厚かましかったかしら。

おじいちゃんが住んでいた家のおじさんおばさんは亡くなってしまったから、本家のいことがおじさん、おばさん、そして私の両親に声をかけてくれたのですね。親族のご縁を大切にしてくれて、とても感謝しています。

おじいちゃん、どうか末永く、安らかに。私がそちらに向かったときは、昔のこだわりは捨て、笑顔で逢いましょう。

商売人になりたかったといわれているおじいちゃんへ

へ 北前船の豪商 高田屋嘉兵衛さん / 三波春夫 へ

曲の3番にいろいろな地名が出てくるので、そこまでかけていただけると有難いです

